

2006年 日本交通心理学会 国際学術交流 スイス・ドイツ視察旅行

2006年9月19日～27日

蓮花一己(国際交流委員長)

日本交通心理学会・国際交流委員会では、会員の国際交流を促進するために、国際会議参加や外国人研究者との交流のために様々な活動を実施してきました。これまで、ドイツやフィンランドでの学会参加及び視察旅行、3回にわたる日本・北欧交通心理学シンポジウムの開催、海外の研究者との合同ワークショップ(谷口,2003に詳しい)などを挙げるすることができます。とりわけ、EU 諸国との交流は長期にわたっており、今日では多くの会員による多面的な協力関係が構築されております。しかしながら、近年のEU主導の大規模研究プロジェクトの進展や関連する国際共同研究の進展の速度は非常に速く、日本も国際的な流れに取り残されてしまう心配もあります。

そこで、平成18年度の学会公式行事として、国際交流委員会では、スイス視察旅行を企画・実施致しました。この視察旅行は、外国の研究所・施設見学や研究者交流を希望する会員の強い希望により実現されたものです。今回のスイス視察旅行では、学会員9名及び同伴者2名の11名が参加致しました(団長:蓮花一己・帝塚山大学)。

スイスを訪問先に選定した理由は、当地が自動車交通の事故防止面で、イギリスや北欧諸国と並んで優れた実績をあげている点と、後述するスイス事故防止協会との継続的な交流が行われており、協会を通じて、スイスの関係機関の協力が得られる点を重視しました。とくにヨーロッパでは長期間の交流が欠かせませんし、初対面では一見さんの扱いを受けて、通り一遍の説明しかしてもらえません。この面では1990年に京都で国際応用心理学会が開催された折に日本を訪問された Huegenin 氏が副所長を務める協会を訪問するのが相応しいと委員会では判断しました。

9月19日から27日までの視察旅行を通じて、スイス事故防止協会(BfU、Council for Accident Prevention)の Denis Huegenin 副所長には大変にお世話になりました。氏は昨年(2006年)まで国際応用心理学会交通心理部門の部会長を務められ、かつ国際交通心理学会の会長として活躍されてきた著名な研究者です。視察旅行の滞在スケジュールは以下の通りでした。

9月19日(火) 日本成田空港あるいは関西空港出発、チューリヒを経てベルン到着

9月20日(水) 午前 スイス事故防止協会(BfU)訪問  
BfU 活動、2段階運転免許制度、  
運転者再教育についての説明及び質疑応答  
夕方 BfU 主催歓迎レセプション

9月21日(木) 午前 ベルン州警察訪問  
午後 州警察組織、学校での交通教育の説明及び質疑応答  
シュバルチェンブルク村立小学校訪問  
交通教育の授業参観及び質疑応答  
交通安全センター(TCS Stockental)訪問  
センター活動の説明、トレーニング見学、質疑応答

9月22日(金) 午後 チューリヒ応用心理大学応用心理学研究所(交通部局)訪問  
運転適性診断、交通指導員(教官)養成訓練の説明

9月25日(月) ベルンからドイツリュードスハイム、ピースバーデンへ

9月26日(火) フランクフルトから日本へ

9月27日(水) 日本到着

最初の訪問施設はスイスベルン市にあるスイス事故防止協会(BfU)でした。ベルンはスイスの首都ですが、中世の時代からの歴史的街並みを残す素敵な街であり、世界歴史遺産にも登録されています。

BfUでは、協会の活動の概略、スイスの交通安全対策、2段階免許制度、運転者教育・再教育などについて、Huegenin氏やSiegrist氏ら交通心理学者や専門家から説明がありました。



©Toshiya Yoshimura

図1 スイス事故防止協会訪問の様子

BfUは1938年に誕生し、1984年に民間組織に移管したと云うことです。活動の対象は、交通ばかりではなく、スポーツ、家庭レジャー、日常製品などの事故を扱っています。職員は100名程度で、心理学や工学の研究者が多いと云うことです。また、ボランティアベースの1200名がスイス各州のカントンと呼ばれるコミュニティ毎に活動しています。BfUの活動資金は75%が労災や損害保険からの資金であり、25%が道路安全基金に基づいているようです。また、その活動は、1)目標の決定、2)対策立案、3)活動の実施、4)評価、5)さらに必要な活動の決定というサイクルで実施されています。

その活動領域は研究そのものの実施と研究知見の社会での運用から成り立ちます。活動内容は、1)人間行動、2)技術基盤、3)製品安全、4)法的基準であり、各分野において、訓練や専門家へのアドバイス、広報啓発活動を企画・実施しています。また、現在中心的な研究課題として、1)事故の重大性に対する技術研究・事故分析、2)原因分析、3)事故防止検討、意識調査など効果的対策の検討、4)評価研究、有効性研究(行動変容などの効果も含む)が説明では挙げられていました。

スイスでは、スウェーデンで有名になったビジョン・ゼロ計画をさらに自国に合うように修正・改善を加えつつ、交通安全対策を立案・実施しています。対策の効果予測や実施後の効果測定研究を実施しつつ、あらたな対策を構築する姿勢は学ぶべきであると思います。



©Toshiya Yoshimura

図2 司会席の Huegenin 氏と団長の蓮花



©Toshiya Yoshimura

図3 BfU の活動を説明する Siegrist 氏

次の21日は、午前が警察署での交通教育に関する説明を伺った後に、小学校での交通教育を見学致しました。交通教育の担当者は交通警察官の Krebs 氏でしたが、和やかな授業、テンポの良い説明、活発に発言する子ども達など、我々の多くが本当に感銘を受けた授業でした。スイスでは、教育技法や心理学などのしかるべき訓練を受けた警察官が小学校の交通教育を担当しています。交通教育に長期間専従してい

る方が多く、経験豊富であるとの説明でした。また、専門の大学院で交通教育の課程を終了させる制度もあり、多くの警察官がそうしたコースを終了しているとのことでした。



©Toshiya Yoshimura

図4 小学校での交通教育の授業

午後には、VSZ Stockental という郊外にある交通教育センターを訪問しました。スキッドバンでも図5のような下り坂でのスリップ体験や、スライディングシミュレータという路面ごと後輪をスライドさせてスリップ体験させる訓練などが活発に行われていました。図5の写真にあるように、パイロンではなくウォーターバリアを障害物として用いていました。



©Toshiya Yoshimura

図5 TCS Stockental での下り坂のスリップ訓練

22日にはチューリッヒまで鉄道で移動し、チューリッヒ応用心理大学応用心理学研究所を訪問しました。この大学は運転適性診断や交通教育専門家を養成する単科大学です。ここでは、参加者各自の自己紹介に始まり、運転適性検査を体験した上で、立食の歓迎会まで開いて頂きました。その後もジュネーブ訪問など盛りだくさんのスケジュールを参加者たちはこなしていました。Huigenin 氏は大変にご多忙中にもかかわらず、ほとんどすべての行程にお付き合い頂きました。また、ベルン中心部にあるレストラン・カジノでレセプション(図6)も開いて頂き、一同感激しておりました。国際交流委員会としても Huegenin 氏には深く感謝しております。



©Nobuaki Mori

図6 レセプション後の記念撮影(中央が Huegenin 氏)

今回の視察旅行は日本交通心理学会の運営委員会関係者及び会員の皆様のご指導、ご協力無くしては実現できなかったものであり、その支援に対して心より感謝致します。

国際交流委員会では、こうした視察旅行を可能な限り定期的を実施すると共に、諸外国で開催される国際会議の情報提供やサポートを行いつつ、より活発な国際交流に向けて努力致します。会員の皆様の積極的な参加をお願いする次第です。

#### 参考文献

- 谷口俊治 2003 日本交通心理学会 平成14年度春期(第65回)大会講演, 交通心理学研究, Vol.19, No.1, 13-15